放課後等デイサービス　スマートキッズ発達支援研究所便り　「きらっと」１２号　2020 年 12 月 21 日
研究所ホームページ　https://smart-kids.co.jp/labo/

子どもの幸せ（ウェル・ビーイング）を願って

ある光景が生み出したもの
～子どもの貧困と NPO 法人「BOON」の活動から～

研究所員　岡田　行雄

１０数年前のある日の光景です。

乳母車に乗った乳児が母親の差し出すスプーンにのったプリンを、懸命に首を伸ばして食べようとしている光景が目に飛び込んできました。母親はどうしているのかと、乳母車の隣に座っている母親を見ると、左手にスプーン、右手に携帯電話。視線は子どもではなく携帯電話に注がれていました。私はこの光景が忘れられません。校長として勤務をしていた時、待ち合わせのための時間調整で入ったあるカフェでの光景です。

「卵が先か？それともニワトリが先か？」

NPO 法人「BOON」を設立するときに、私が勤務していた中学校の保護者だった今の理事長と話し合った問いがこのことでした。これも今から 10 年ほど前のことです。NPO 法人「BOON」を設立するきっかけとなったのは、子どもの学力低下と家庭の経済状況の関係が指摘され始めたことでした。「子どもの学力と家庭の経済状況」には相関関係がある、ということが明確なエビデンスが不明な中で社会的な話題になりました。教員としての経験を振り返ってみたときに、この相関関係は肌で感じていましたが、これが全てではないとも思っていました。家庭の経済状況を感じさせないような頑張りを見せる子どももいれば、大きな影響を受けて自信を喪失していくような子どももいる。子どもを対象に直接支援するか、それとも親の支援を通して子どもの支援を行い、貧困の再生産を防ぐか、これが「卵が先か？ニワトリが先か？」のことです。私たちは、大人の世界に踏み込むことはできないと考え、子どもの支援を考えることに決め、「子どもの支援を通じて社会貢献活動を行う」を基本的な理念として掲げ活動を始めました。2014 年頃のことです。

私が練馬区の中学校から千代田区の中学校に移動したころ（2008 年・平成 20 年）、「子どもの貧困」の記事が新聞に掲載されはじめ、2014 年（平成 26 年）から急激に掲載数が増大し 2016 年（平成 28 年）には子どもの貧困に関する記事数がピークとなったようです（現在は、急減中です）。ここで言う「子どもの貧困」とは、絶対的貧困と相対的貧困とに区分される中で、所得が全体の中央値の半分よりも低い相対的貧困のことを指していますが、実は、マスコミに記事が掲載され始めた 2008 年以前にも当然のことながら子どもの貧困は存在していましたし、教育格差が存在していました。調べてみると、社会経済的地位《SES》などによる教育格差が根強く存在してきたことが分かりました。私たちの活動では、教育格差の

根本原因を取り除き教育格差を是正することはできませんが、教育格差の再生産、貧困の再生産を防ぐ挑戦をすることは可能だとの思いから、子どもの支援に乗り出しました。

設立当初は、子どもの教育格差の再生産を防ぐ目的で、学習の躓きが起こりやすい小学校低学年の児童や幼児を対象に学習支援を行ったり、様々な体験活動を行ったりして子どもの自己有用感を高め、結果としては学力を向上させていきたいと考えていました。

「認知能力・非認知能力の格差は幼稚園に入る前段階で既に存在し、それがのちの学力格差の基盤となっている。中でも、3 歳になるまでに耳にする語数が家庭 SES によって 3000 万語違うことを指摘した研究」がアメリカから報告され、「学力の基盤である言語関連能力の SES 格差は生後 1 年未満や 2 歳の幼児で確認」されており、近年の研究でも、「子どもが浴びる単語の量ではなく、親子の会話量とその質が言語能力の発達に重要で在り、高 SES な親がそのようなコミュニケーションを積極的にしていることが実証的に明らかにされている。」ということを知る中で、私たちが経験的に理解していた、「高 SES の親は、認知能力の向上・学習習慣の形成につながるような教育的な働きかけを積極的にする傾向がある。」ことが実証的につかめた、という論文に後日接することになり、その思いを強くしたところです。

つまり、これからの私たちの活動は、設立当初の迷いにもう一度立ち戻り、中学生や小学校高学年の子どもを対象にした学習支援以外にも、小学校低学年の児童や幼稚園・保育園に通う子どもとその保護者を対象にした支援も併せて行う必要があるということを確信しました。冒頭にあげたあるカフェでの強烈な光景が忘れられない結果から来るのかもしれません。

結びに、現在の学習支援「中３勉強会」について触れておきたいと思います。

私は長く中学校教育に携わる中で、様々な家庭の子どもたちと関わってきました。NPO 法人としては、学習支援を行うことを活動の主なねらいとしてきましたが、学習支援だけではない様々な観点からの支援をそれぞれの子どもが求めているようにも思っています。勉強の苦手な子、活発に活動できない子などが悩みを抱え沢山の支援を必要とし、一方の、勉強のできる子、活発な子は支援を必要としていないように感じがちですが、そうでもなさそうです。子どもの幸せ（ウェル・ビーイング）を目指し、幸せな子どもが沢山いる環境を作らなければならないと思います。少子化対策が進行する中で大人が子どもを育てる物理的な環境は整っていくかもしれないのですが、そこで生まれた子どもたちが「幸せ感」を感じて生きていける環境を整えていくことも同じように大切だと思います。

政策にぶつぶつ小言を言いながら、「塩化ナトリウムは、水に溶けるとプラスの電気を持ったナトリウムイオンと、マイナスの電気を持った塩化物イオンに分かれるよ。」など、活動に参加できる時には子どもたちに理科で分からないところを教えています。何らかの課題を抱えている子どもが、私たちのかかわりによって少しでも前向きに生きる力をもったり、学習に自信をもったりして新たなチャレンジをして欲しいと思うからです。

おかげさまで、このような「BOON」の趣旨に賛同して、一緒に活動してくださる大学生や、最近では会社を退職された方々が、子どもの学習支援に関わっています。教職志望で 1 年生の時から「BOON」の活動に参加してきた大学生が、4 年間で見違えるように成長する姿を見るのは楽しいですし、お孫さんと同じくらいの年齢の中 3 生を相手に、丁寧に教えている同輩の姿を見るのも、心温まる一コマです。会社員だったころは怖い管理職だったのではと思うような方々ですが、中３生にとってもいろいろな経歴の方と

触れ合うことができるのでとても良い学習環境だと思います。とにかく関わろうとする気持ちと言葉かけがまずは大切なのかもしれないと、当たり前のことを改めて実感しているこの頃です。

なお、子どもの貧困や教育格差の実態を調べるにあたって、次の図書を参考にしました。

⑴　教育格差―階層・地域・学歴　　松岡亮二　　ちくま新書

⑵　子どもの貧困―日本の不公平を考える　　阿部彩　　岩波新書

岡田　行雄（おかだ　ゆきお）帝京大学大学院教職研究科　客員教授

東京都の公立中学校教員を経て、世田谷区教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部指導主事、足立区教育委員会教育指導課長、公立中学校長としての職務を通して、理科教育研究、学校経営に携わるほか、東京都や全国の校長会役員として文部科学省等の事業に関わるなど、多様な経験をさせていただくことができました。中学校長を退職した直後に、私の持っていた課題意識が共通の知り合い（現理事長）と出会ったことがきっかけでNPO法人「BOON」を設立し、子どもの貧困や教育格差の問題に取り組み、子どもの自己有用感や社会貢献力を育成する活動を始めました。開設当時から、帝京大学の学生さんをはじめ幾つかの大学の学生さんが積極的に参加してくれています。

さらに、2020年より、スマートキッズ発達支援研究所の所員として、障害のある子供たちの教育や支援について共に考える機会を得ました。多くの学校が、放課後等デイサービスの重要性を理解し、連携は徐々に深まりつつあります。今後は、さらに具体的な取り組みを紹介し合ったり、取り入れたりしながら共に子どもの幸せ（ウェル・ビーイング）を目指していきたいと思います。